芭蕉

サフラムは近歳刊行せし六物新志に載せてより、始めて西洋歐邏巴、亞弗利加、亞細亞洲の諸國に生ずる、草花の蕊なることを人皆知れり、それまでは蠻國に生ずる紅花を、蜜にて製するものといひ、其草の形狀知れざるゆゑ、此邦山中に生ずる猩々袴といふ草を充てたる人もあり、漢土にも時珍の綱目までは知れざるにや、隰草の部に番紅花を出だし、釋名に泊夫藍撒法郎をならべ載せて、西蕃回回地天方國の紅藍花なりといひ、又獸部羊心の附方に正要を引きて、泊夫蘭は卽回回紅花なりといひ、同腎の附方にも泊夫蘭と書けり、遵生八牋には撒夫蘭とも書けり、皆是蕃名を字音に假借する者にて、實物を見ざる故なり、形狀は新志に載せて、一種花の中心三線の蕊をなし、細き長舌の狀に似たり、その色赤黃にして味辛く、少苦を帶びて、油氣のあるに似たり、其氣芳烈にして人の鼻を撲つもの、又一種春苗を生じ、秋に至りて花を開く、六瓣にして其色緋黃、其香百合に似たり、花後に實を結ぶ、ともに三房をなす、根は韮蒜（ニラコビル）に似て、毬をなせり、然るに品類ありて、形狀其地に隨ひて少々異なりといへり、さもあらむ、以前浪華兼葭堂へ、蕃國より贈り來るを寫眞し、一幅となし、人に見せらる、予○茅原定其圖をこひ得て爰に摸す、○略圖新志に載せたるものとは、形狀また少々異なり、萬國地球圖に載せたる形狀ともおなじからず、いかにも種類多しと見ゆ、此品近歳貴賤一統に珍重し、其價韓參に等しくすれど、時珍の綱目には、心氣鬱結、或は活血驚悸の症のみに用ひて、格別の功能を載せず、近歳主治を法のごとく數人に用ひ見るに、功能奇驗格別の事更になし、兎角にも末世に及びて、貴賤一統奇を好む癖情、世と推し移ると見ゆ、いふ程の功能奇驗あらば、漢土の書にも多く載すべし、當今清朝の方書、多く舶來するにも未見當たらず、此邦の主治方書は、往古より大抵漢土を法則とすれば、風土人情格別に異なる事はあるまじ、

〔倭名類聚抄二十草〕芭蕉　唐韻云、芭蕉、巴焦二音、和名發勢乎波、其葉如席者也、兼名苑云一名甘蕉、